新見公立短期大学紀要　第29巻
pp. 95－102, 2008

原　著

生活習慣病に視点をあてたA短期大学看護学科卒業研究の動向分析

山縣　由子*・掛屋　純子・木下　香織・古城　幸子

看護学科

（2008年11月12日受理）

1999年のカリキュラム改正以降9年間のA短期大学看護学科の卒業研究の分析より，生活習慣病に視点をあてた卒業研究の動向と指導上の課題の示唆を得ることを目的に研究を行った。その結果，卒業研究総数に対する生活習慣病に視点をあてた卒業研究の占める割合は全体の12%であった。生活習慣病の改善等に関する課題9分野での研究件数は，「休養・心の健康」が22%で最も多く，「栄養・食生活」「糖尿病」「たばこ」「歯の健康」「循環器病」「アルコール」「身体活動・運動」「がん」の順であった。

研究対象は，幼児・児童・学生が全体の48%を占めた。研究方法は実態調査研究が最も多く78%を占めた。データ収集方法は，質問紙調査法が57%を占めた。研究動機は生活習慣に対する問題と課題の明確化が76%を占め，研究目的は生活習慣の実態の理解であり，生活習慣の実態として行動・認識・意識・生活習慣要因と多岐にわたっていた。研究内容の分類では，生活習慣の実態が82%で最も多く，生活習慣病の看護介入は13%であった。どの分野においても大きな経年的変化は見られなかった。今後の課題として，実態調査が多くを占めていたので，今後は事例研究等の質的研究に関心が向くような指導が必要である。また，研究対象として，児童・学生が多かったため患者や一般人等の広い視野の下で対象の選択ができるようにすること，また，生活習慣病に対する介入研究にも関心が向くように関わっていく事が重要である。

（キーワード）看護学科，卒業研究，生活習慣病，動向

はじめに

看護教育カリキュラムの中で，卒業研究は，習得した知識・技術を統合し主体的な看護実践ができ，それを通して自己の看護感を深めることを目的に行われ学習の統合として重要な位置を占めている[1]。A短期大学でも同様に，研究活動の基礎を学ぶことにより研究的態度を養い自己の看護観を深めることを目的に卒業研究を行っている。また，看護研究を指導していくにあたっては，学生の主体性の尊重が重要であり，学生の問題意識の明確化と研究目的の明確化が必要である[2]。

そこで，学生の問題意識と研究目的を明確にするために，1996年のカリキュラム改正以後に教育を受けた学生の卒業研究1999年度以降2007年度までの9年間の卒業研究を対象とし学生の研究の動向を把握する必要があると考えた。

近年，ライフスタイルの変化により学童期からの肥満傾向の増大など健康への影響が問題となっている[3]。また，平成20年より生活習慣病の予防を目的にメタボリックシンドローム対策として特定検診が実施されている。この様な社会的背景に対し学生がどの様な関心を持ち生活習慣病に対する研究を行っているか把握する必要があると考えた。卒業研究の先行研究として，卒業研究全体に対しての研究内容の分析の研究はみられる[4)5)6)]が，生活習慣病を視点としその内容を分析した卒業研究は見当たらなかった。

そこで，カリキュラム改正以後の1999年度以降9年間の卒業研究を対象とし，生活習慣病に視点にあてた卒業研究の動向を分析し，卒業研究への今後の指導上の示唆を得たいと考えた。

Ⅰ．研究の目的

本研究の目的はカリキュラム改正以降9年間のA短期大学看護学科の卒業研究の分析より，生活習慣病を視点とした卒業研究の動向と指導上の課題の示唆を得ることである。

Ⅱ．研究方法

1．研究対象

*連絡先：山縣由子　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

1999年度から2007年度までのA短期大学看護学科の卒業研究561件のうち生活習慣病を視点とした卒業研究67件を分析対象とした。

2．分析方法

生活習慣病を視点とした卒業研究67件を，生活習慣病に視点をあてた卒業研究の占める割合，生活習慣病の分野別の割合と経年的変化，研究動機，研究目的，研究対象，研究方法，データの収集方法，研究内容別にみた研究対象者の分類に分けて動向を分析した。

Ⅲ．用語の定義

1．生活習慣病の9分野

厚生労働省の生活習慣病やその原因となる生活習慣の改善等に関する課題9分野[7]「栄養・食生活」「身体活動・運動」「休養・心の健康づくり」「たばこ」「アルコール」「歯の健康」「糖尿病」「循環器病」「がん」とした。

2．生活習慣病の複合分野

卒業研究を分析した結果として抽出された「厚生労働省の生活習慣病やその原因となる生活習慣の改善等に関する課題9分野」を複合した分野のことである。

「栄養・食生活/身体活動・運動」「栄養・食生活/休養・心の健康」「身体活動・運動/休養・心の健康」「休養・心の健康/たばこ」「休養・心の健康/循環器」「栄養・食生活/身体活動・運動/休養・心の健康」「栄養・食生活/身体活動・運動/糖尿病/循環器病」「栄養・食生活/身体活動・運動/休養・心の健康/たばこ/アルコール」を複合分野とする。

表1　年度毎の生活習慣病を視点とした卒業研究の推移

年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
卒業研究総数(件)	63	57	67	60	59	72	62	62	59	561
生活習慣病の研究数(件)	9	4	10	8	4	6	11	5	10	67
生活習慣病の研究割合(%)	14	7	15	13	7	8	18	8	17	12

表2　生活習慣病「21世紀における国民健康づくりの目標の課題となる9分野」の年度毎推移

分野		生活習慣病9分野/ 年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
1		栄養・食生活	2		3	2				2	1	10
2		身体活動・運動		1								1
3		休養・心の健康			4	1	1		6	2	1	15
4		たばこ	1			1		3	1		1	7
5		アルコール	1	1								2
6		歯の健康			1		1			1	1	4
7		糖尿病	2	1		1	1	1			2	8
8		循環器病			1			1	2			4
9		がん									1	1
複合分野	1・2	栄養・食生活/身体活動・運動				1						1
	1・3	栄養・食生活/休養・心の健康				1					1	2
	2・3	身体活動・運動/休養・心の健康						1			1	2
	1・2・3	栄養・食生活/身体活動・運動/休養・心の健康	1	1		1	1		1		1	6
	3・4	休養・心の健康/たばこ	1									1
	1・2・7・8	栄養・食生活/身体活動・運動/糖尿病/循環器病	1									1
	1・2・3・4・5	栄養・食生活/身体活動・運動/休養・心の健康/たばこ/アルコール			1							1
	3・8	休養・心の健康/循環器							1			1
計			9	4	10	8	4	6	11	5	10	67

単位・件

Ⅳ．倫理的配慮

「看護研究集録集」として公表された論文を対象とし，個人が特定される研究論文の著者名は分析対象から削除した。研究対象の年度の卒業生に，研究の趣旨や個人情報保護の方法について書面にて説明し，同意が得られなかった場合も分析対象から除外した。

Ⅴ．結果

1．生活習慣病に視点をおいた卒業研究の占める割合（表1）

1999年から2007年までの9年間の卒業研究の総数561件に対する生活習慣病を視点にあてた卒業研究の件数は67件であり，全体に対する割合は平均12%であった。生活習慣病を視点とした年度毎の研究件数は4～11件（7～18%）であり，平均件数は7件（12%）であった。

2．生活習慣病の分野別の割合と経年的変化（表2）

厚生労働省の生活習慣病やその原因となる生活習慣の改善等に関する課題9分野（以下生活習慣病9分野とする）に基づいた9年間の研究動向は，分野毎では「休養・心の健康」が15件（22%）と最も多く，「栄養・食生活」が10件（15%）であり「糖尿病」が8件（12%）「たばこ」が7件（10%）「歯の健康」「循環器」が4件（6%）ずつ，「アルコール」が2件（3%），「身体活動・運動」と「がん」が1件（1%）ずつであった。また複数分類での研究は15件（22%）あり，そのうち「栄養・食生活」と「身体活動・運動」と「休養・心の健康」の複数分野が6件を占めた。「栄養・食生活」と「休養・心の健康」の複合分野が2件，「身体活動・運動」と「休養・心の健康」が2件，その他の複合分野は1件ずつであった。

3．研究動機（表3）

研究動機は，「生活習慣病に対する問題と課題の明確化」が51件，「看護学生が抱えている問題と課題の明確化」が6件，「将来看護師となる看護学生の立場での看護に対する問題と課題の明確化」が3件，「看護体験による興味・関心・疑問・課題の明確化」が3件，「大学生という自分の状況に関連した問題と課題の明確化」が2件，「看護師が抱えている問題と課題の明確化」が2件であった。

4．研究の目的（表4）

研究の目的は，「生活習慣の実態」51件，「生活習慣に対する看護介入」12件，「新たな知見」が3件であった。「生活習慣の実態」の内容は，「行動」が12件，「影響要因」が7件，「認識」が4件，「意識」が3件，「意識・行動」が10件，「認識・行動」が5件，「意識・知識・行動」が2件「意識・行動・影響要因」が2件，「意識・影響要因」が2件，「認識・知識・行動」が1件，「意識・知識」が1件，「認識・行動・影響要因」が1件，「その他」が2件であった。

5．研究対象（表5）

9年間の卒業研究の研究対象は，小学生が9件，糖尿病患者8件，看護学生7件，大学生6件，中学生5件，高校生・高齢者・妊婦が3件ずつであり，保育園児・幼稚園児・労働者・一般社会人・住民・喫煙経験者各々2件ずつ，看護師・主婦・スタッフ等が1件ずつであった。

6．研究方法（表6）

9年間の卒業研究の研究方法は，実態調査研究が52件（78%），文献研究が6件（9%），事例研究が4件（6%），準実験研究が4件（6%），実態調査研究と文献研究の複合研究が1件（1%）であった。

表3　研究の動機

研究の動機/年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
生活習慣に対する問題と課題の明確化	6	2	7	8	3	6	9	4	6	51
看護学生が抱えている問題と課題の明確化			1		1		1	1	2	6
将来看護師になる看護学生の立場での看護に対する問題と課題の明確化		1	1						1	3
看護体験による興味・関心・疑問・課題の明確化	2	1								3
大学生という自分の状況に関連した問題と課題の明確化			1						1	2
看護師が抱えている問題と課題の明確化	1						1			2

単位：件

表4　研究の目的

研究の目的/年度		1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
生活習慣の実態	行動	1	2	2	3			2	1	1	12
	影響要因			3	1		1	1	1		7
	認識						1		1	2	4
	意識			1				1		1	3
	意識・行動	2		2	2	1	2			1	10
	認識・行動					2		1		2	5
	意識・知識・行動	1			1						2
	意識・行動・影響要因					1				1	2
	意識・影響要因								1	1	2
	認識・知識・行動			1							1
	意識・知識				1						1
	認識・行動・影響要因						1				1
	その他							2			2
生活習慣に対する看護介入		3	1	1			1	4	1	1	12
新たな知見		2	1								3

単位：件

表5　研究対象

研究対象/年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
小学生	1	2	2	2	1				1	9
糖尿病患者	2	1		1	1	1			2	8
看護学生			1		1			1	4	7
大学生		1	2				1	1	1	6
中学生	1			1	1		2			5
高校生			2				1			3
高齢者				2		1				3
妊婦				1		1		1		3
保育園・幼稚園児			1						1	2
労働者							1		1	2
一般社会人				1			1			2
住民						1	1			2
喫煙経験者	1					1				2
看護師	1									1
主婦			1							1
スタッフ（音楽療法）							1			1
ドッグセラピー実施中の個人							1			1
塩分摂取量過剰摂取者	1									1
毛髪	2									2
その他			1			1	2	2		6
計	9	4	10	8	4	6	11	5	10	67

単位・件

表6　研究方法の分類

研究方法/年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
実態調査研究	5	2	9	8	4	4	8	2	10	52
文献研究			1			1	2	2		6
事例研究	2	1				1				4
準実験研究	2	1						1		4
実態調査研究と文献研究							1			1
相関関係実証型研究										0
実験研究										0
計	9	4	10	8	4	6	11	5	10	67

単位:件

表7　データ収集方法

データ収集方法/年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
質問紙調査法	5	2	7	6	4	2	5	1	6	38
面接法	1	1	2	1		1	1	1	1	9
心理検査法									3	3
観察法				1		1				2
質問紙調査法と面接法							1			1
観察法と面接法							1			1
生理学的測定法										0
その他(実験研究・文献研究)	3	1	1			2	3	3		13
計	9	4	10	8	4	6	11	5	10	67

7．データの収集方法（表7）

9年間の卒業研究のデータ収集方法の件数は，質問紙調査法が38件（58%）と最も多く，面接法が9件（13%）面接心理法3件（4%），観察法が2件（3%）質問紙調査法と面接法の複合収集法が1件（1%），観察法と面接法の複合収集法が1件（1%），その他は13件（19%）で実験研究と文献研究が該当した。

8．研究内容別にみた研究対象者の分類（表8）

研究テーマを分析しカテゴリー化した結果，生活習慣の実態・生活習慣の看護介入・新たな知見の3カテゴリーに分類された。3カテゴリーの占める割合は生活習慣の実態が55件（82%），生活習慣の看護介入が9件（13%），新たな知見が3件（4%）であった。各々のカテゴリー毎に生活習慣9分野及び複合分野で分析した結果，生活習慣の実態では，生活習慣病の9分野のうち最も多いのは，「休養・心の健康」で14件（21%）であった。次は「栄養・食生活」の10件（15%），「たばこ」の7件（10%），「歯の健康」と「糖尿病」が3件（4%）ずつであり，循環器病が2件（3%），「がん」が1件（1%）であった。「アルコール」単独テーマでは皆無であった。生活習慣病の複合分野は14件（21%）であった。次に研究内容別にみた研究対象者の分類は，園児の親・小学生・中学生・高校生・大学生・看護学生を「幼児・児童・学生」に，高齢者・労働者・企業人・一般人・住民・主婦を「一般の人」に，糖尿病患者・入院患者・一般の患者・妊婦・禁煙成功者を「患者及び病院受診者」に，看護師・スタッフ・アニマルセラピストを「医療関係者」として分類した。その結果「幼児・児童・学生」が30件で最も多く，次は「一般の人」と「患者及び病院受診者」が15件で同数であり，「医療関係者」が4件であった。「幼児・児童・学生」の分野では，小学生が9件で最も多く，その研究内容は「栄養・食生活」「身体活動・運動」「休養・心の健康」「歯の健康」「生活習慣病の複合分野」であった。次いで看護学生が7件であり，その研究内容は「栄養・食生活」「休養・心の健康」「歯の健康」「生活習慣の複合分野」であった。「一般の人」

では，一般人を対象としたものが6件であり最も多かった。「患者及び病院受診者」では糖尿病患者が8件で最も多く，その研究内容は生活習慣病の看護介入で5件であった。次いで妊婦が4件であり，その研究内容はたばこの実態で3件であった。「医療関係者」は4件と少なく，その内看護師が2件を占めた。

Ⅵ. 考察

1. 生活習慣病を視点とした卒業研究の推移

9年間の卒業研究における生活習慣病を視点とした卒業研究の占める割合は，7～18%で研究年度により研究件数に差がある。前半の3年間の研究件数は23件で，その次の3年間は18件，後半の3年間は26件であった。前半の3年間の件数が多いのは，その社会背景として1996年に厚生労働省が「生活習慣病」という概念を導入した影響が考えられる。2005年から2007年までの3年間で26件であり，全体の39%を占めており生活習慣病に対する学生の関心が高まっている事が考えられる。

2. 生活習慣病を視点とした卒業研究の内容の分析

1）生活習慣病の分類

厚生労働省の21世紀における国民健康づくりの目標の課題となる9分野で，生活習慣病を分類すると，「休養・心の健康」は15件で22%と最も多く，学生の精神面に対する関心の高さが伺える。調査方法が認識や意識を見る内容が多く，具体的な生活行動を調査する内容が少なかったことが影響していると思われた。次が「栄養・食生活」10件で13%を占めた。精神面に次いで食生活に対する関心が推測される。また，「たばこ」に視点を当てた研究は7件と10%を占めた。複合分野では，「栄養・食生活」と「身体・運動」と「休養・心の健康」の3分野を複合した研究が6件と多く，食事・運動・休養の3分野を関連付けた研究が多かった。

疾患別では，「糖尿病」が8件と最も多く，「循環器病」が4件，「がん」は1件のみであり，生活習慣病の中では糖尿病を身近に感じテーマに選択している。しかし，がんの一次予防に関する研究が少なく，今後はがんの一次予防にも関心が持てるような教育が必要である。

経年的変化は，どの分野も持続的に平均的に研究が行われているが，「栄養・食生活」の分野では，前半が7件，後半が3件で，前半が多くを占めた。また，「休養・心の

表8　卒業研究9年間の研究内容別にみた研究対象者の分類（n=67）

研究内容別/研究対象者別		幼児・児童・学生						一般の人						患者及び病院受診者					医療関係者			その他	計	
		園児の親	小学生	中学生	高校生	大学生	看護学生	高齢者	労働者	企業人	一般人	住民	主婦	糖尿病患者	入院患者	一般の患者	妊婦	禁煙成功者	看護師	スタッフ	マニアルセラピスト			
実態	栄養・食生活	1	1	1	2		1	1			1				1		1						10 (15%)	55 (82%)
	身体活動・運動		1																				1(1%)	
	休養・心の健康	1	1	1		2	1	1	1		2		1			1			1	1			14 (21%)	
	たばこ					2					1						3	1					7 (10%)	
	アルコール																						0	
	歯の健康		2				1																3(4%)	
	糖尿病													3									3(4%)	
	循環器病											1	1										2(3%)	
	がん									1													1(1%)	
	生活習慣病の複合分野		4	2	1		4	1											1		1		14 (21%)	
看護介入	糖尿病													5									5(7%)	9 (13%)
	循環器病			1								1											2(3%)	
	休養・心の健康										1												1(1%)	
	歯の健康										1												1(1%)	
知見	アルコール																					2	2(2%)	3 (4%)
	複合分野																					1	1(1%)	
計		2	9	5	3	4	7	3	1	1	6	2	2	8	1	1	4	1	2	1	1	3	67(100%)	
		30						15						15					4			3		

健康」では，前半が6件，後半が9件と後半が多くを占めている。また，「休養・心の健康」では，2001年4件，2005年6件と他の分野及び年度に比較して件数が多い。経年的変化として，学生の関心は，食生活に関する関心から精神面の関心へ移行していると考えられる。

2）研究対象

研究対象は，小学生が9件で13%を占め最も多く，生活習慣病を予防するためには小学生からの生活習慣予防の重要性を講義等で理解しているものと思われる。身近な存在として看護学生が7件で10%を占めていた。次いで，大学生の6件で9%を占めていた。看護学生と大学生の2分野で19%を占め，自分が所属している領域の健康の問題と課題に関心をもちテーマを選択していることが考えられる。小学生・看護学生・大学生・中学生・高校生・保育園幼稚園児が全体の48%を占め，幼児・児童・学生を対象とした研究が大半を占めた。また，糖尿病患者を対象にした研究が8件で12%をしめ，生活習慣病における疾患は糖尿病のみであった。研究対象として幼児・児童・学生以外の研究対象は件数が少ないのは，研究のテーマを決定する時期が3年次の臨地実習以前であることが影響していると考えられる。今後は，壮年期・老年期や一般社会人等に対する研究に学生の関心が向くように教育していく必要がある。

経年的変化は，小学生を対象とした研究9件の内，8件が前半に集中しており，後半では2007年に1件のみであり小学生を対象とした研究が減少している。2007年度の看護学生を対象とした研究が4件と多いが，他の分野は経年的にほぼ横ばいで大きな変化はなかった。

3）研究方法とデータ収集方法

研究方法は，実態調査研究が，78%を占め，生活習慣に対する実態を調査する研究が大部分を占めた。その次が，文献研究で9%を占め，次が事例研究と準実験研究で6%ずつを占めた。また事例研究は2001年以降2004年に1件のみで全く研究されていない。実態調査が大半を占め事例研究が少ないのは，研究のテーマを決定する時期が3年次の臨地実習以前であることにより患者に関連した事例研究等が少ない現状が考えられる。この結果は，2005年に実施した古城らの研究[8]と同様の結果であった。しかし小野寺は，学生の卒業研究において看護の対象である人間を統合的に捉え，看護の関わりに端を発し，展開する事例研究を積極的に取り入れるべきである[9]と述べていることより，事例研究は重要であり，実態調査のみでなく学生が行なった看護を内省評価できるような研究が増える事が必要であると考えられる。また生活習慣病は，生活習慣の変容を目標とすることから，対象者の認識や行動に焦点を当てた事例研究等の質的研究が重要であると考える。

データの収集方法は，質問紙調査法が57%で大半を占めた。次いで，面接法が13%，心理検査法が4%，観察法が3%を占めた。実態調査研究が78%と多くを占めることより質問紙調査法が大半を占めている。面接法と観察法は，質問紙調査法と比較してかなり少なかった。生活習慣病は個々人のライフスタイルと大きく関連した疾病であり，短期間での研究では捉えにくいという難しさがある。そのため，横断的研究手法に偏りがちになるが，面接や観察など個人を捉える研究方法にも学生の関心を高める指導上の課題が明らかになった。

4）研究動機及び研究目的

研究動機は，生活習慣に対する問題と課題の明確化が76%と多くを占め，学生は生活習慣に対する問題と課題に関心をもっていると言える。また，研究目的は，生活習慣の実態を知る事を目的にしたものが，78%を占めた。生活習慣の実態の詳細は，「行動」が最も多く，「意識・行動」「影響要因」「認識・行動」「認識」「意識」の順であった。生活習慣の実態を知る事が，研究の目的と動機として最も多く，その中でも生活習慣の行動に焦点を当てたものが多くみられた。行動科学では，行動療法で“行動”という場合，言語や運動を伴う“行為”だけでなく，不安や怒り，悲しみや憂鬱などの“感情”，状況やものごとの受け止め方や考え方である“認知・思考”も含まれており，行為と感情と思考は相互に作用し合う[10]。生活習慣病に対するアプローチとして行動のみならず感情や認知・思考の分析も重要である。このことより，今後は行動のみでなく感情や認知・思考等の情動面に焦点を当てた研究が増えるような教育が必要である。

5）9年間の総数でみた研究内容別にみた研究対象者の分類

9年間の卒業研究の総数をカテゴリー化した研究内容と研究対象の分類で分析すると，生活習慣の実態を研究した研究対象者は幼児・児童・学生を対象としたものが最も多く43%で，一般の人は18%，患者及び病院受診者15%，医療関係者6%であった。生活習慣病として幼児・児童・学生の生活習慣の実態のみならず，一般の人や患者に対しても生活習慣の実態が研究できるようなフィールドの確保や，関係機関との連携による教育の配慮が必要である。また生活習慣病の看護介入としては，糖尿病患者に対する研究が最も多かった。糖尿病は自己コントロールが容易ではなく合併症も多く併発することで，生活習慣病の最も代表的な疾患であることが影響しているが，今後は，糖尿病以外の疾患への介入研究を動機づけられるように，教育指導する必要性が示唆された。

3. 生活習慣病を視点とした卒業研究の今後の課題

9年間の卒業研究のうち生活習慣病を視点とした卒業研究の占める割合は多いとは言えない。しかし，ライフスタイルの変化により生活習慣病が増加していることより，学生が生活習慣病に関心をもちアプローチしていくことができるような教育が必要である。また実態調査が大部分を占めていることから，今後は学生の関心が調査研究に焦点化されるだけでなく，生活習慣病の介入研究（事例研究・質的研究）に興味がもてるような教育や教員の関わりが重要である。学生は，卒業研究のテーマを決定する際，自分の今まで生きてきた経験，身近な存在など自分に関連のある事をテーマとする傾向があるため，今後は学生以外の患者や一般社会人へも視点を広げるよう指導する事が必要である。

謝辞

研究をまとめるにあたり貴重な資料を提供してくださいましたA短期大学の卒業生の皆様に深く感謝致します。

引用文献

1）佐藤紀子：「知」を統合する機会としての論文指導，Quality Nursing，5（2），15-19，1999
2）小野寺杜紀：卒業研究の目標・指導にあたって－準学士の卒業研究－，Quality Nursing，5（2），4-8，1999
3）学校保健行政の動向，国民衛生の動向，54（9），359-369，2007
4）津本優子他：看護学生の卒業研究論文の実態調査－過去5年間の研究内容分析－，島根大学医学部紀要，30，23-33，2007
5）古城幸子他：3年課程看護学生の「看護研究」への取り組みと教育評価－本学の2000年から2004年の5年間の分析，26，51-60，2005
6）松本幸子他：新見女子短期大学における学生の看護研究の動向－過去5年間の分析より－，新見女子短期大学紀要，18，93-99，1997
7）保健と医療の動向，国民衛生の動向，54（9），7-92，2007
8）5）前掲
9）2）前掲，4-8
10）畑栄一他：行動科学・健康づくりのための理論と応用，南江堂，43-69，2006